



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1160

08.06.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート7

第6章

ポーランドでのキャンペーン

「真実是非常にもろいものであり、それを守るためには嘘というボディガードが必要なのだ」。

ウィンストン・S・チャー
チル

ポーランドとの戦争にほぼ勝利し、「ヒトラーは無防備な国民に対する勝利を誇るために帝国議会で立ち上がった」。これが、従来の歴史学者や反ナチ宣伝家の代弁者であったウォルター・クロンカイトが、1939年のポーランド人を描いた方法である。それ以来、彼の描写は歴史的ドグマと

なり、ポーランドはヒトラーのいじめから自国を守るにはあまりにも臆病で小さな平和を愛する国として描かれている。しかし、前章で述べたように、ポーランド人は平和的交渉を頑なに拒否して英仏の同盟国を激怒させた。そして、彼らは決して「無防備な民族」ではなかった。第一次世界大戦後に近代ポーランドが誕生して以来、ヨゼフ・ピウスツキ元帥は積極的な対外政策に呼応するように大規模な軍備計画を推し進めた。ピウスツキは東欧全土で好戦的なトラブルメーカーとして知られ、シレジアのドイツ人を含むすべての近隣諸国と小競り合いを繰り返した。ヴェルサイユ条約の連合国側作成者でさえ、ポーランド人が武装解除したドイツ人を卑怯にも犠牲にしたことを非難した。

ピウスツキは同時にソ連への本格的な攻撃を開始した。これは失敗に終わったが、ピウスツキはソ連によるポーランドへの反攻を阻止した。ドイツで国家社会主義が政権を獲得した日、ピウスツキは挑発することなく、密使をパリに派遣し、帝国への共同侵攻を提案した。準備不足のフランスは恐れおののき、好戦的なポーランド人はおろか、誰も脅かすことのできない弱小国を相手に無申告の戦争を仕掛けるというピウスツキの犯罪的な提案を拒否した。ピウスツキはユダヤ人と結婚していたため、ドイツ人全般、特に国家社会主義に対して個人的な反感を抱いていた。

前章で述べたように、ポーランド政府は1934年1月に帝国と友好条約を締結した。同時にピウスツキは、バルト三国の指導部を対独軍事同盟に誘い込むため、リトアニアにミルシュタイン大使を派遣した。パリの国際銀行ロスチャイルド家の娘婿であったミルシュタインは、リトアニア人に冷淡に迎えられた。リトアニアの旧首都ヴィリニウスは、二枚舌のマーシャルに占領されたままであった。

1935年に彼が癌か毒で亡くなった後も、ポーランドの兵器製造は衰えることなく続けられたが、ワルシャワの高官の中には、スターリンとヒトラーの両方に同時に対抗することの自殺行為的な愚かさを理解し、新ドイツとの和解に傾き始めた者もいた。ゆっくりと両国は漂流を続け、やがてブレットが歌う安易な征服のサイレンがポーランド人を破滅へと誘うようになった。1939年8月、ポーランド国内ではヒトラーに対する民衆の煽動が熱を帯び、150万人のドイツ人に対する無制限な暴徒行動が起こった。何人のドイツ人が家から引きずり出され、激昂した暴徒たちによって殴打されたり、石で打ち殺されたりしたのか、正確にはわかっていないが、国際赤十字の推計では、1919年から20年間で3,000人以上の男性、女性、子

供が殺害されたとされている。1939年の間だけでも、約500人のドイツ人が激昂したポーランド人によって殺害された。ドイツ人少数民族に対するポーランドの残虐行為を記録したスイスの記録は、60年以上も前から公開されていたにもかかわらず、第二次世界大戦前のポーランドとドイツの関係では軽視されてきた。

イギリスの軍事戦略家たちがポーランドの手先とロンドンで協議している間に、ポーランドの主要紙『クリエ・ポルスキ』は「ドイツは滅ぼされなければならない！」という横断幕の見出しを掲げた。(ゲッペルス、p.304)。1939年晩夏のヒステリックな状況は、ドイツのUボート艦長ヴェルナー・ハルトマンによって描写されている。「数週間前からポーランドでは動揺が続いていた。「新聞やキャバレーはドイツ国民を馬鹿にしていた。新聞やキャバレーはドイツ国民を馬鹿にし、ドイツ国民は理由もなく告発され、逮捕された。ドイツ系民族はリンチされた。アイアンサイド将軍（イギリス帝国参謀総長）がポーランド軍を視察した。大風呂敷を広げた軍人たちは、テンペルホーフ（すなわちベルリン）の戦いやエルベ川の「国境」について語った。ダンツィヒは計画的に切り離され、グディンゲン---中途半端なコンクリートブロックと海沿いの木製フェンスでできた分裂症的な陣地---は東ヨーロッパの偉大な港になるはずだった。新聞の見出しは毎日、このエスカレートする排外主義の新たな、そしてより心配な行き過ぎを報じていた。あるときは、ポーランドの艦隊がわれわれのためにバルト海にサラミスを用意し、波がわれわれの血で真っ赤に染まってリューゲンの白亜の断崖に至るだろう、と主張した」(33)。

それでもヒトラーは、誰もその結末を予想できない戦争を始めることで、敵の思うつぼにはまるつもりはなかった。彼の鉄のような自制心に苛立ったワルシャワ当局は、ポーランドの特殊部隊にドイツ国境の小さな町グライヴィッツを攻撃するよう狂気じみた命令を下し、1939年8月31日に実際に占領した。ポーランド軍は第三帝国の東部国境を越えて約35回出撃したが、ヒトラーを唯一の侵略者として描くことに熱心な宮廷史家たちは、この攻撃について言及することはなかった。現在でも、ヒトラーは交渉による戦闘終結を求めている。反ナチス派の『マーシャル・キャベンディッシュ 第二次世界大戦図解百科事典』の執筆者が認めざるを得なかったように、「ドイツのポーランド侵攻は、ベルリンのポーランド大使が、ダンツィヒと回廊の問題の平和的解決策を提案したヒトラーの提案を拒否した後に開始された」(22)。自国が攻撃を受けている以上、総統には対抗

措置を命令する以外の選択肢は残されていなかった。こうして9月1日の朝、神の怒りのごとく電撃戦がポーランドに襲いかかり、ポーランド人は望みをかなえた。

ちょうどその頃、ドゥーチェは9月5日にパリで5カ国による会議を開き、「問題の根源となっているヴェルサイユ条約の条項を検討する」よう要請し、和平への決意を示した。ヒトラーはこれに同意し、英仏両国に対し、ドイツの都市ダンツィヒをドイツ領とすることさえ許されれば、ポーランドからの攻撃を中止し、撤退すると伝えた。この差し迫った合理的な要求に対して、西側民主主義諸国は、相互に破滅的な結果をもたらす戦争を好んだ。

ポーランドは20年前から武装していた。ポーランドが「無防備」でなかったことは、その軍備を垣間見るだけで十分である。ポーランドは、10万人の予備役からなる「国防軍」によって支えられた30個歩兵師団に、近代的装備を備えた100万人の軍隊を動員した。キャベンディッシュ *百科事典* は、ポーランドの軍隊を「世界最大級の軍隊」と評している(22)。ポーランドの歩兵部隊は、300両以上の戦車からなる装甲旅団に支えられており、ポーランドの唯一の防衛手段であったオペラ騎兵隊という連合国側の神話は嘘であった。ポーランドは馬軍団（全部で37個）を運用していたが、それはドイツやアメリカを含む世界の他の近代国家も同様であり、騎兵部隊は依然として現代の戦争に不可欠な存在であった。

第二次世界大戦を学ぶ者の多くは知らないが、ポーランドは潜水艦5隻、駆逐艦4隻、水雷掃海艇6隻、機雷掃海艇1隻からなる近代的な海軍を運用していた。これらの戦力は他の海軍に比べれば貧弱に見えるが、バルト海の狭い海域に適したものであり、第二次世界大戦でドイツが最初に発砲した古めかしい敵艦シュレーズヴィヒ＝ホルシュタインに比べれば、確実に最新のものであった。1939年10月に首都が陥落した後も、ワルシャワの海軍は戦い続けた。例えば、半年後の1940年4月8日、ドイツの輸送船リオ・デ・ジャネイロがポーランドの潜水艦オルゼルによってバルト海で撃沈された。

ポーランドは1000機近い航空機を保有していた。先進的なP.37「エルク」中型爆撃機は、ドイツのトップ中型爆撃機ハインケルHe111H-16よりも時速40マイルも速く飛んだ。PZL P.23単発爆撃機は、開戦時にポーランド空軍に配備された航空機の中で最も数が多く、114機が第一線部隊に配

備され、さらに11機が補充機として配備された。即席飛行場からの運用が可能な頑丈なカラス（「カープ」）は、1,330ポンドの爆弾搭載量を186m/hで飛ばし、背側と腹側の砲手位置に武装を備えていたため、ドイツの同型機である双発のメッサーシュミット110や急降下爆撃機スツーカーよりも防御力が高かった。

しかし、ポーランド空軍の最高傑作戦闘機は、ワルシャワの国立航空工場（*Panstwowe Zakłady Lotnicze*）が生産した軽快なPZL P.11だった。P.11は、ドイツ空軍のほとんどの敵機より速度は遅かったが、機敏で機動性に優れていた。熟練した飛行士（ポーランドの飛行士の多くは優れた飛行士であった）の手にかかれば、P.11は手ごわい敵であった。第二次世界大戦のほとんどの歴史は、ポーランド作戦の最初の空中戦勝利がドルニエ中型爆撃機2機に対するP.11パイロット1機の勝利であったことに触れていない。また、短い作戦期間中に失われた285機のドイツ空軍機は、ポーランド空軍の戦闘能力を証明している。

メッサーシュミットMe109Eはポーランド軍機より優れていたが（当時、世界のあらゆる戦闘機に対してそうであったように）、P.11は世界中の同時代の空軍が飛ばしていた追撃型と同等、あるいはそれよりも優れていた。P.11は、ロシアのポリカルポフ双発機、イタリアのCR-42、イギリス空軍のグロスター・グラディエーター、日本の三菱A5M（米軍コードネーム、クロード）、アメリカのブリュースター・バッファロー---1939年当時、第一線で活躍した戦闘機と同等、いやそれ以上の性能を持っていた。ポーランドの航空機は「ほとんど時代遅れ」どころか、当時としては標準的かそれ以上であり、エルクの場合のように最新鋭機であることもあった。

第二次世界大戦に関する主流派の記述では、ヒトラーの信奉者は決してフェアな戦いでは勝てないいじめっ子であるというプロパガンダのイメージを維持するために、国家社会主義者に敗れた相手を必ずと言っていいほど弱いもの、あるいは無防備なものとして描いている。彼らの意図は明白であり、超歴史的である。わずか1ヵ月足らずの戦闘でドイツ国防軍が何万人もの死者、行方不明者、負傷者を出したことは、ドイツ軍が単にポーランドを闊歩して楽勝したのではないことの証拠である。ポーランドの抵抗を“無益”とか“哀れ”などと誹謗することは、西側連合国や自国の指導者に裏切られながら、祖国のために巧みに勇敢に戦った地上軍、水兵、空軍を卑下することにほかならない。アドルフ・ヒトラー自身が作戦後、

ダンツィヒで公に認めたように：「この際、ポーランド兵を正当に評価しよう。ポーランド人は多くの場所で勇敢に戦った。下士官は最大限の努力をした。彼らの将校には知性が欠けていた。彼らの最高指揮官は絶対に失敗した。彼らの組織はまさにポーランド人だった”

ポーランドがダンツィヒ港に面したヴェスタープラッテを防衛したことほど、彼の評価が真実であることを示す例はないだろう。1924年以来、ドイツとポーランドの間の潜在的な火種を和らげようとする国際連盟の交渉官とワルシャワの政治家たちの誓約に反して、彼らは密かに半島を主要な軍事的中継施設として建設していた。ポーランドの歴史家マチェイ・ヨナシュによれば、「（武装要塞の）地下の位置は、施設の存在を規定する協定の条件によって禁止されていたため、隠さなければならなかった。半年ごとに交代する衛兵の下士官にも秘密にされていた。将校と上級下士官だけが地下戦闘陣地のことを知っていた。” (66).この嚴重な秘密のヴェールには、コンクリートで補強された最新鋭の武装施設が隠されており、そこには精鋭部隊の中隊が配備された多数の機関銃座、迫撃砲、大砲があった。第二次世界大戦が勃発する15年も前に、このような秘密裡の、違法とさえいえる要塞が存在していたことは、ポーランドがドイツとの紛争に備えていたことを明らかにした。

9月1日、ドイツ軍はヴェスタープラッテの防御の広さに気づかず、ヴェスタープラッテに正面攻撃を仕掛けたが、隠された城塞に近づく前に撃墜され、ポーランド軍の75ミリ野砲によって装甲攻撃は粉碎された。救援に駆けつけたのは、ドレッドノートという過ぎ去りし時代の老艦、1909年製のシュレースヴィヒ＝ホルシュタインだった。ヨナシュによれば、ポーランドの野砲は「戦艦の監視員によって発見され、直ちに激しい砲撃が加えられた。最初の艦砲弾は75ミリ砲があった木の幹に命中し、次の2発は75ミリ砲を完全に機能停止に追い込むほど接近した。（この砲は後にドイツ軍によって修理され使用され、最終的にスターリングラード・ポケットでの使用に終止符が打たれた）」（68、69）。

この勇敢な老戦艦は、施設に直撃弾をどんどん撃ち込んでいった。「その残忍な砲撃は、戦艦がわずか400メートルの距離から施設に大砲を撃ち込む間、午後9時まで続けられた。そのため、ポーランド人はストロングポイント・プロムから避難し、その人員はガードハウス1の警備を手伝うために引き揚げた。グリツマン准尉は、撤退命令を出したときの砲火の激しさについてこう証言している。

ポーランドのヴェスタープラッテはドイツ軍を相手に1週間持ちこたえたが、彼らは決意の固い敵には騎士道精神で対抗した。「降伏後、ヨナシュは、「ポーランド軍将校は、防衛が相手の間で獲得した尊敬の印として、サーベルを保持することを許された」と報告している（71）。ポーランド人の死者は15人で、相手の死者は200人から300人であった。

ポーランドの30個師団、1個機甲旅団、842機の作戦機に対して、ドイツは106個師団、6個機甲師団、3000機を投入した。しかし、この比較は誤解を招きかねない。というのも、これらのドイツ国防軍の半数以上は、西方で予想される英仏の攻撃に瞬時に対処できるように準備しなければならなかったからである。ドイツ軍はポーランド軍に対して数的・技術的に優位に立ってはいたが、その優位は書類上見かけほど顕著ではなかった。

ポーランドの指導者たちは、自分たちだけでヒトラーに勝てるなどという幻想は抱いていなかった。西側連合国が救援に来るまでドイツの進撃を遅らせるという彼らの戦略は、もちろん、すべてイギリスとフランスの約束に基づいていた。ポーランド陸軍士官学校校長のタデウシュ・クトルゼバ將軍は、ブルザ川反攻作戦の指揮官として有名だったが、「フランスからの救援を待つ必要がある」ことを知っていた。フランスが迅速に対応したとしても、ポーランドは6～8週間は自軍に頼らざるを得ない」。しかし、総統はそれだけの時間を与えるつもりはなかった。フランス軍総司令官ガメラン將軍は、「ポーランド軍のことは完璧に知っている。ポーランド軍は優秀であり、指揮官も賞賛に値する。ポーランド軍は持ちこたえられるだろう。ポーランド軍は少なくとも半年は持ちこたえられるだろう。

しかし、そのような考えは第一次世界大戦の時代遅れの戦略に根ざしていた。連合軍の指揮官たちは、部隊の準備に少なくとも3週間は必要だと考えていたが、その頃にはドイツ軍はすでにポーランドでの戦争を終結させていた。ドイツ国防軍の急速な進撃に衝撃を受けたフランス軍は、ライン川とモーゼル川の間にあるドイツ西部の防衛線に対して作戦を展開しようとした。しかし、委員会の無責任さと、どこの民主主義国家にもある腐敗が蔓延し、フランスは攻撃を組織するのに1週間を要した。

その時点では、この作戦は時期尚早で中途半端なものだった。ドイツ軍が連合軍の指揮官たちが想像していたよりもはるかに速く、深くポーランドに侵攻してきたため、攻勢の責任者であったガストン・プレテラット將軍は、準備ができていようがいまいが、すぐにでもドイツ西部を攻撃せよ

という厳しい政治的圧力を受けることになった。彼はフランス第2軍集団の第一線部隊14個を含む31個師団を急遽編成した。この強力な部隊を指揮していたにもかかわらず、プレテラは、かろうじて17個師団という圧倒的劣勢のドイツ第1軍を相手に、果敢に前進した。フランス軍を失望させたのは、ドイツ国境を守るジークフリート線が前線より後方にありすぎ、大砲隊が防衛線と交戦する前に敵の砲火を浴びることを余儀なくされたことであった。しかも、ジークフリート線は155ミリ砲弾に対して難攻不落であった。フランス軍が地上最大の220ミリ砲と280ミリ砲を持ち出した後でも、プレテラートの砲撃は速く正確であったが、鉄筋コンクリートでできたジークフリート線の防御は無傷であった。ジークフリート線は持ちこたえ、「ドイツの鋼鉄」という言葉に新たな意味を与えた。

一方、エドゥアール・レヴァン将軍の第4軍は左翼をザール河に展開し、ドイツ軍の領土7.5マイルを占領した。同時に、コンデ将軍の第3軍はヴァールントの森のサリエントを占領した。プレテラートはこれらの陣地から、9月17日に開始されるジークフリートラインへの直接攻撃に備えた。しかし、それまでにワルシャワは包囲され、ポーランド軍は敗走していた。これ以上の作戦は無意味と判断され、中止された。皮肉なことに、プレテラートの作戦開始予定日は、ロシア軍がポーランド東部に進駐したのと同じ日であった。しかし、少なくともフランスは、中途半端ではあったが、自分たちの役割を果たそうとした。ポーランドが軍事援助についてあらゆる確約を得ていたイギリスは、ポーランドを助けるために指一本触れなかった。イギリスにはポーランドを救う手段も意思もなかった。ポーランドは今、どんな口実であれ、ドイツと戦争をすることを熱望していた。

ポーランド軍を本当に打ち負かし、同時に西側連合軍の攻勢を食い止めたのは、急進する自動車化装甲車とドイツ空軍の緊密な連携だった。このような斬新な連携は、現地の航空指揮官が地上の将校と協働することに依存していた。このユニークで非常に効果的なサービス間の組み合わせは、非国家社会主義軍事界の階級意識の構造では知られていなかった。それは、アドルフ・ヒトラーが国民を鼓舞した階級協力の精神から生まれたものであった。ユンケルJu87シュトゥーカは、敵の陣地に穴を開け、そこから大量のパンツァーが押し寄せるといふ、空飛ぶ大砲の役割を果たした。

ドイツ空軍総司令官ヘルマン・ゲーリングは、フランスがドイツ西部の脆弱な防衛力に対する深刻な脅威を組織する前にポーランドを打撃する最

善の手段として、航空機と戦車を使用する前例のない戦術を構想した。そのため、ドイツ軍の航空師団は国境沿いのポーランドの要塞に大きな穴を開けた。9月1日の朝、南方軍集団の侵攻前衛部隊はこの隙間から突入した。ユンカー、ハインケル、ドルニエの各爆撃機は、地上の敵軍の生命線、特にポーランドの援軍と物資を前線に運ぶすべての道路と鉄道を切断し続けた。彼らは戦場を次々と孤立させ、通信と輸送を麻痺させ、パンツァー勢に対する集団反撃を阻止した。

この最初の電撃戦の重要な目的は、地上の危険なポーランド空軍をただちに壊滅させることだった。しかし、ドイツ空軍が捕捉し破壊したのは、格納庫の近くや格納庫に駐機していたわずか30機の敵機だけだった。ポーランド軍は賢明にも、軍用機を国中の多数の飛行場に分散させていた。その結果、彼らの空軍は空中戦で破壊されなければならなかった。そして、そうなった。P-23はこの作戦の最初の2週間、ドイツ軍の自動車部隊やパンツァー部隊を攻撃し、広範囲に活躍した。しかし、メッサーシュミットのパイロットは急降下爆撃機のほとんどが目標に接近する前に壊滅させた。錚々たるカラス部隊は85%以上の死傷者を出し、わずか17機の「カープス」が国境を越えてルーマニアになだれ込み、そこで無念にも押収された。

しかし、ポーランド軍は果敢に戦い続けた。9月7日、ポーランド空軍は一度の交戦で15機のドイツ軍機を撃墜し、最大の空中戦勝利を収めた。ワルシャワは、ドイツ空軍の航空兵の意表をつく最新の早期警戒システムを運用していた。彼らがポーランドの首都に到着すると、すでにP.11戦闘機の大群が待ち構えていた。ポーランド空軍のF.カリノフスキ少佐によれば、「敵機の接近を早期に警告するための観測所の網が1939年夏にワルシャワ周辺に設置され、これらの観測所は無線や電話で情報をパシュート旅団の作戦室に伝え、そこからすべてのスクランブル命令が出された」。

ドイツ空軍のパイロットたちは上空の制空権をめぐって争ううちに、地上での戦友の支援という最大の目的から遠ざかっていった。その結果、9月15日から18日にかけて、ポーランド軍第11師団と第38師団の「ソスノコフスキ・グループ」は、ドイツ第14軍が試みた3回の包囲網を粉碎した。ポーランド軍は徹夜で進軍し、昼間は戦闘を続け、戦略的なサン河の横断を阻止しようとするドイツ国防軍の努力をすべて打ち破った。その過程で、ドイツ軍から20の大砲と180の車両を鹵獲した。それ以前に、第4パン

ツァー師団の戦車はワルシャワへの奇襲に失敗して撃退された。第35パンツァー連隊と第12ライフル連隊が首都近郊を前進した際、実際に市街地から向けられた砲兵の激しい砲火を受けた。多くの死傷者を出し、撤退を余儀なくされた。しかし、その背後には、強大な第10軍が迫っていた。第10軍はゴーラ・カルヴァリアのヴィスワ河畔まで駆け上がり、精鋭のロツツ軍を壊滅させた。

ポーランド軍総司令官リッツ・スミグリー元帥は、自軍の最高戦力の急速な消滅に怯え、東方への退却を命じた。歩兵4個師団と騎兵2個旅団からなる強力なポモルツェ軍とポズナン軍は、軍団全体を率いてワルシャワに向かって撤退した。クトルゼバ將軍の指揮の下、首都から西に約65マイル離れたブズラ川近くのクトノ近郊に陣地を構えた。9月10日、川を渡ろうとしたポーランド軍は、ウッチから駆け上がってきた数で劣るドイツ第10軍に阻まれた。

反攻のイニシアチブを握ったポーランド軍は、猛烈な決意で攻撃に転じ、ローヴィチ近郊の橋頭堡を占領し、ドイツ軍第30歩兵師団を押し返した。第10軍は補給を断たれ、ドイツ国防軍南方軍集団の側面全体が突然脅かされた。大逆転が目前に迫り、キャンペーン全体が危機に瀕したとき、ドイツ空軍が救援に飛んだ。ヘンシェル123攻撃機とシュトゥーカ急降下爆撃機は、1日に8回以上の任務をこなし、敵が保持する橋頭堡を粉砕し、ジアロシンとチェストホワ周辺のポーランドの防御陣地を麻痺させた。双発エンジンのメッサーシュミットMe-110は、クトルゼバ將軍の優秀な部隊を集中的に空爆し、ドルニエとハインケル中型爆撃機による水平爆撃でさらに壊滅させた。降り注ぐ爆弾と砲弾の大洪水の中、ポーランド人とその馬はパニックで気が狂ってしまった。

ドイツ軍第8軍は包囲された第10軍と連携することが可能になり、さらに空爆によって、ポモルツェ軍とポズナン軍の連合軍を側面から槍で突き刺しながら、自動車化師団とパンツァー師団を北上させることができた。痛手を負った蛇のように、ローヴィチとソチャチェフ周辺でドイツ軍に襲いかかり、信じられないほど激しい白兵戦が繰り広げられた。9月10日、17万人のポーランド兵が降伏し、1週間にわたる師団規模の激しい戦闘が終結した。

その成功を受けて、ドイツ空軍の爆撃機はチェストホワで持ちこたえるポーランド第7師団に襲いかかった。ルフトフロツテ4による丸一日のノン

ストップの空爆と爆撃によって、師団全体が一斉に降伏させられた。そのわずか5日後、ルフトフロッテ4のパイロットは、ポーランド軍がパンツァーの鉄の輪に囲まれていたラドムの南で、さらに多数の敵部隊を降伏させ、歴史に残る勝利を繰り返した。

ブズーラの戦いは終結したが、ドイツ国防軍の前進を阻止することで西ドイツに対するフランスの攻撃を可能にするというライツ・スミグリーの希望は叶わなかった。事実、プレテラート將軍の部隊はすでにジークフリートラインへの攻撃を開始していた。ワルシャワ上空での航空作戦が開始されようとしていた矢先、ゲーリングは突然、400機の中型爆撃機を西部戦線に引き揚げた。老朽化したユンカースJu-52輸送機は、爆撃機として緊急に投入されたが、その役割はまったく適さなかった。わずか30機の「おばちゃんユス」には、2ポンド燐焼夷弾の木箱が詰め込まれていた。これらは、各ユンカースに配属された2人の兵士によって、文字通り人力で貨物室のドアから運び出された！

ポーランド作戦をできるだけ早く終結させるため、ヒトラーは初めて戦闘に介入した。これまでヒトラーは將軍たちに自由裁量権を与えていた。しかし、彼らは十分に迅速に動いていなかった。総統はポーランドを3週間以内に壊滅させ、連合国が予想する西側からの攻撃（実際にはすでに始まっていた）に対する防衛態勢を整えるのに十分な時間を確保したいと考えていた。総統は、ヴィスワ川以東のポーランド軍の残りを掃討するため、第14軍にリヴォフから北東に移動するよう命じた。その第十九パンツァー軍団が罠にはまり、作戦は終わったも同然だった。これでワルシャワは完全に包囲された。ポーランドの全軍が壊滅または敗走したため、首都の防衛は無意味となった。ドイツ軍はワルシャワ防衛軍に平和的降伏を命じ、不必要な流血を避けた。しかし、ポーランド人はまだ西側連合国からの救済を信じており、これを拒否した。これに対してゲーリングは、わずか48時間の間に1,776回の爆撃を集中的に行い、9月27日にワルシャワを降伏させた。ドイツ軍第8軍司令官ブラスコヴィッツ將軍は、ワルシャワの守備兵を虐待することなく、戦争の栄誉を与えた。これは、彼とドイツ国防軍の騎士道精神と人道的感覚を見事に反映した行為であった。

この作戦は短期間ではあったが、ドイツ軍の死者10,572人、行方不明者（推定死亡者）3,400人、負傷者30,322人という残酷なものであった。694,000人以上のポーランド人が捕虜となった。ワルシャワでの降伏に先

立ち、リッツ・スミグリー、ベック、そして傲慢と貪欲が招いた他のすべての人々は、ポーランド国民を不幸の渦中に置き去りにしてルーマニアに逃亡した。ここから、ガムラン将軍が約束したフランス軍がポーランドを救うはずだった。しかし、ポーランドの共謀者たちがルーマニアで見つけたのは、抑留だけだった。他のポーランド人は、祖国を裏切ったまさにその国であるイギリスに逃げ込み、ヒトラーに対する無脳で自滅的な戦いを続けた。結果的に、これらの愚か者は、1943年4月にカティンの森で15,000人もポーランド人が処刑されたことを、二枚舌のイギリス人同志の同盟国であるソ連が暴露する日まで生き延びた。

親連合国であるポーランドの亡命政府のトップ、ウラディスワフ・シコルスキ将軍がこの残虐行為の調査を要求すると、英国秘密情報部は、英国がソ連の参加を必要としていた時期に、彼がスターリンを疎外することを恐れて、3ヵ月後にジブラルタルでの不正な航空事故で彼を暗殺した。チャーチルとルーズベルトは、先に多くのプロパガンダ価値を獲得したポーランドの同盟国の大量殺戮を脇に迫りやり、悪名高いテヘラン会議でポーランドをソ連の悪魔に丸ごと引き渡した際に、彼らを完全に処分した。

対照的に、ヒトラーはポーランドの独立国家を維持したかったが、非交戦の代償としてポーランドの分割を要求したスターリンに阻まれていた

(*Cavendish*, 37)。ソビエトは、9月17日にすでに作戦が決定した後、ポーランドに侵攻し、不可侵条約の一部をわずかに守ったにすぎなかったのだから、特別な配慮を受ける資格がなかったのは確かである。彼らはポーランド人を恐れていた。ポーランド人は、20年も前にピウスツキ元帥の軍隊がソ連に侵攻し、共産主義帝国をほぼ崩壊させたのだ。それゆえ、彼らはこの敗残国民に卑怯な復讐をしたのである。

ポーランドの裏切りは糧となった。1944年8月、ロシアの大規模な支援を約束するソ連のラジオ放送に促されて、ポーランド人はドイツ占領当局に対する武装蜂起を起こした。ヴァッフェンSSは、1939年のドイツ空軍の空爆よりもはるかに壊滅的な攻撃で、ポーランドの首都を煙に包まれた廃墟にした。ポーランド人がドイツ軍とまたもや無謀で破滅的な戦いを繰り広げる中、ワルシャワの東の郊外に赤軍が救援態勢を整えているのが見えた。しかし、スターリンは、ポーランド軍を撤退させ、「自分たちの汁で煮込む」ように命じた。英国がワルシャワに物資を空輸する許可を求めたが、スターリンは拒否した。その後まもなく、蜂起は多くの犠牲者を出し

て敗北した。ポーランド人はまたしても、自国を外国人の手先としか考えていない外国人の見え透いた約束に騙されたのである。

アドルフ・ヒトラーの合理的な要求を拒否したために、ポーランド人はこれ以上の苦しみを味わった。この交渉の余地は、その後のポーランドと世界の破壊、死、苦しみの大パノラマに比べれば、いかに小さく、些細なものであったろう！

100万人規模のポーランド軍を1ヵ月足らずで撃破できた国は、間違いなく地球上に存在しなかった。ドイツ軍の進撃を遅らせ、フランスが西側を攻撃するのに十分な時間を確保するという連合国の計画は、当時の戦略基準からすれば健全なものだった。ヒトラー自身の将軍たちでさえも、ポーランド軍が3週間あまりで制圧できるとは誰も考えていなかった。そのため、ヒトラーは勝利の功績のほとんどを、主に地上を支援する航空戦力へのこだわりと、ポーランド人が長期にわたる抵抗の望みを失ったヴィスワ河の東側で敵軍を大規模に包囲したことに負っている。

このキャンペーンは、白人種の最大の希望を打ち砕こうとする小心な陰謀家たちに対する、国家社会主義者の天才と勇気の勝利であった。しかし、それはまた、欲深い政治家やポーランド外の意図を持つ外国人に裏切られた貴重な民族にとっては破滅的なものだった。さらに悪いことに、1939年のポーランドにおけるアーリア人の相互殺戮は、西欧文明にとっての悲劇であり、そこでは、偉大な民族戦争と西欧の真の衰退が始まったのである。



NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物
多くの言語の何百冊もの本
多くの言語の何百ものウェブサイト

